

基本的な考え方

熊野古道アクションプログラム

紀北交流拠点基本計画策定調査報告書

熊野古道センターワークショップ / 識者ヒアリング
協働プロジェクト

古道センターへの提案

全体的な考え方

- 熊野古道のことが全てわかる施設
- 古道の保全・活用
- 中心テーマは「道」。そこから自然・信仰、道、旅などへ展開
- 世界遺産としての独自性
- 立地に際して環境保全への配慮と景観との調和を検討
- みんなで作り上げる
- 「動くセンター」をコンセプトに
- 従来からの活動者の思いを尊重
- 体験型
- 成長しつづける必要がある
- 古道を歩くための知識、守るための知識のあるミュージアム
- 交流拠点としての性格も理解し、周辺自治体等との地元調整が必要

機能面・施設面での考え方

来訪者の受け入れ

- ビジター（来訪者）への様々な対応

学術

- 中心機能は古道の学術センター
- 古道に関する研究・学習の場
- 参詣道と霊場の博物館
- 様々な資料の収集、保存
- 熊野学等地域学の研究の場

情報

- 東紀州地域に関する情報提供
- ここへ来れば「全容が」「昔が」「今（歩くための情報）が」わかる
- 世界遺産の周知、P.R（中心施設）
- 参詣道、霊場、伊勢路等3県の情報提供の場

市民活動

- 熊野古道に関する市民活動を支援
- 地域活動している各団体がプラスになる内容を本部が持つ

地域

- 古道全域での連携・協力
- 地域センター（道の駅等）との連携
- 古道域の安全防災管理と情報提供

世界遺産

- 全世界への発信

設備

- 展示と収蔵への配慮

集客面での考え方

- 古道センターと集客施設とは、分類した上で一体の構想の中で検討
- 幅広く様々な人々が利用

運営面での考え方

- 運営する人が重要である
- 施設は総合案内拠点であり、ステージは古道全域である

熊野古道 現地

世界遺産登録候補地とそれを結ぶ街道と文化的景観

5つの方向性

- テーマは道。そこから自然・人・信仰に展開
- 学術性と経済性の共存
- みんなで作り上げる活動するセンター
- 成長していくセンター
- 古道を説明する手段としてのセンター

世界遺産を知り、学ぶ 古道を歩くために知り、学ぶ 古道を五感をもって感じる 古道を通じ心身の安らぎ 東紀州地域とのふれあい	古道来訪者をもてなす ビジターへのサービス・交流 古道の情報収集・提供 古道域の地域間の連携 古道に関する活動・研究
ビジター（来訪者）	地域（運営・活動）/ 研究者

人

熊野古道全体のマネジメント 『運営編（後期策定）』へ

熊野古道を活用するにあたっての運営管理

- 熊野古道の“適度”な利用を行い、保全と活用を図る
- 情報の一元管理と能動的な活用が必要
- 「量的」「質的」なマネジメントで新たな付加価値を創造

古道センター機能の方向性 「機能計画」へ

基本的な考え方

- ビジター（来訪者）への様々なサービス機能（歩くための静礎提供・もてなし・安らぎ・楽しさ・言葉・P.R.）
- 古道域の情報収集・整理・情報発信
- 古道全域の活用システムの中でのセンター機能
- ふれる、体験する、開かれた博物館機能（参詣道、霊場）
- 世界遺産としての周知・古道を紹介・世界発信
- 古道・熊野学等研究者のための機能
- 古道に関する様々な市民活動のための機能
- 地域活動団体を尊重し、各地域センターとの連携機能
- ビジター・地域のための緊急・防災体制機能
- センター（学術性）と地域振興（経済性）は分離・共存

具体的な機能の要件項目

- 来訪者の受け入れ
- 学術研究
- 熊野古道にかかわる市民活動
- 構造上の配慮点

古道センター施設の方向性 「施設計画」へ

基本的な考え方

- 古道の持つ自然環境との融合・景観調和
- 東紀州地域環境（歴史・文化）との融合
- 東紀州地域資源の幅広い利活用
- ビジター+地域住民がふれる、つくる、参加できる施設
- 古道を通し、自然・人・生きものを知る、思う施設
- 将来にわたり、みんなで創り上げていく施設
- 運営・管理を考慮した使いやすく、持続可能な施設
- センターの機能を十分踏まえた施設

具体的な施設の要件項目

- 体制/工程
- 施設設計
- 周辺地
- 後背地整備

古道センターの運営の方向性 『運営編（後期策定）』へ

- 制度の制定
- 運営母体の検討
- 運営メンバーの検討
- 活動内容の充実
- 運営コストの低減
- 地域センターとの連携